

編集後記

■『Language Education』13号をお届けでき安堵している。今号は、学長市村佑一先生から玉稿を頂戴した。子供時代から学生時代に触れた英語教育、NHK時代の異文化体験を語りながら、ところどころにユーモアあふれ、意外な一面を披露していただいた。教養第二外国語のドイツ語で『ファウスト』の講読やレセプションでカール・ブッセの詩の朗読など、今の語学運用能力中心の教育ではありえないのだが、こうしたレベルの語学教育も当時の大学だからこそ可能だったのではないか、現代の大学教育もそうした余地があればと個人的には思う。それはともかく、市村学長からはこれからの英語学習への期待と重要な提言もしてくださった。心より感謝申し上げる。

■今年度は、諸々の事情で論文3本と投稿が少なかったが、研究所主催の研究会やセミナー活動が活発に行われた。今年の特徴は、他の機関との共同もしくは協賛開催の形で初めての試みである。情報教育研究所との共同開催は、近年の情報機器を活用した英語学習の実践を中心にしたもので、情報機器と英語学習の結びつきの最新情報を得られた。また、近隣の高校教員や住民も対象にした、英語研究会とグローバルセミナーは、高大連携や地域連携の目的を含めたものである。キャンパス内に限定されていた活動に大きな広がりが見られた。また、あらためて実感したのだが、他の機関と連携・協力することで得られるものが大きかった。研究所のホームページもあらたに開設され、おかげさまで、研究・教育・発信の3本柱がようやく立ち上がったという感がある。

■全学の英語科目で、今年度から共通テキストとしてオックスフォード大学の出版している英語テキストを導入した。CEFR（ヨーロッパ共通語学レベルシステム）に対応し基本的な英語コミュニケーション学習が可能となること、1年から3年まで共通テキストとして使用できること、日常の実践的英語コミュニケーションや異文化理解に配慮した内容、付属CD-ROMによる自学自習などの利点から採用した。共通テキストをいかに効果的に活用できるかはここ数年の課題である。英語教科担当の先生方には共通テキストの利用の御協力願ひ、テキストの利用方法に知恵を絞っていただいております。また、徐々にではあるが、「キャリア英語」系履修者人数を見ると、資格取得への関心が高まっているようである。さらに実際の受験に結びつくようになってほしい。一方で、TOEICなど英語関係の試験に挑戦する学生たちに資するような資格対策講座などの充実といった課題がある。

■2020年までに、大学入試の形態が大幅に変わる。高校生は、基礎学力をしっかりと身につけることを求められる。英語は、小学校から必修化され中学・高校の段階では、特に「聞く」「話す」の運用能力が重視されるようである。一見、英語ばかり重視され母語である日本語が等閑にされているような印象を受けるが、「ことば」はどの言語も大切にしたいと思っている。他国の例から教えられることだが、母語の「ことば」が消滅するところには誇れる文化は育たないと思う。

■最後になったが、今年度は例年以上に英語担当教員の先生方、江戸川大学の教職員の方々には、様々なところでお世話になった。こうした方々の理解と協力のおかげで、多くの試みが可能となった。あらためて心より御礼を申し上げます。また、いつものことながら、学術情報部の高橋恵美さんにも、紀要発行以外のことでも大変お世話になった。心より御礼申し上げます。